

一日迄來年二月卅日計日人別充一斗十月廿日以前總送寺家

〔延喜式四十四勸解由〕凡年料炭者從三十一月一日迄二月卅日日夏月申官官下符大藏省即准當時沽以直充之

〔殿中申次記〕正月廿七日

一御炭 貳十荷

高雄山 神護寺

〔御老女衆記〕大奥女中分限

御本家略○中 一炭拾五束略○中 右上臈御年寄

〔宗長手記〕大永六年十月、中郷土佐守ふる知人、二三里へだてありき、つけて炭十荷かれこれ、此里は山遠くて炭薪賣買もたやすからず、難得の音信懇志々々、文の返しにつけて

炭焼

その里に住こ、ちさへしがらきの眞木の炭やく煙たてつ、

〔人倫訓蒙圖彙三〕炭焼 あやしの山賊の業をもこ、ろをつけて觀すれば、心を延るたよりなり、横立山のおく檜原のかげ、岩のかげ道たどくしく、谷ふかき木の間より立のぼりたるけぶりのありさま、世にたぐひなきは、炭がまの風情なり、かさねの衣はうすけれども、冬の寒さをよるこぶは、炭やく翁の心、世わたるたづき程、かなしきはなかるべし、

〔空穂物語 吹上之上〕ま所けいしも三十ばかり有り、いゑどもあづかり百人ばかりあつまりて、ことしのなりはい、こがひすべきことさだむ、すみやき木こりてなどいふものども、あつまりてたいまつれり、

〔七十一番歌合上〕九番 左 炭やき

秋までは煙もたてぬ炭やきの心とすます月をみる哉

炭竈も我にはをとる思ひかなけつことしらぬ戀の煙よ